

令和5年度・令和6年度「ちばっ子の学び変革」推進事業研究成果報告書

市川市立二俣小学校

研究主題 「自分の考えを豊かに表現できる子の育成」～学び合いの活動を通して～

## 1 学校の概要

本学校区は、市川市の東端、船橋市との境にあり、南に湾岸道路と埋め立て地の工業地帯、北に京葉道路が走る。学校周辺は物流倉庫、商業施設、工場等に囲まれており、緑の樹木は少ない。児童数は年々減少し、現在は160名程度であるが、小規模校の良さを生かし、きめ細かな児童理解と良好な人間関係の構築に努めている。令和2年に創立50周年を迎え、令和4年度より信篤小学校、高谷中学校、そして本校の3校で「信篤三つ葉学園」として小中一貫教育への取り組みを開始した。

## 2 研究の概要

### (1) 児童生徒の実態と課題

令和4年度全国学力・学習状況調査において、本校児童の算数の結果は、全体としては全国平均や県平均をやや下回る結果となった。算数の領域別に見ると、例年同様「D データの活用」が大きく平均を下回っていた。本校では、令和2年度から令和4年度まで「D領域」に絞って算数の授業研究を進め、毎年実施している校内の学力検査で、「D領域」においては一定の成果を得ることができた。

令和5年度においては、算数科全体で全国平均と比べて若干下回る結果となったが、県平均と同程度の結果となった。令和5年度からは、「A 数と計算」に焦点をあてた授業研究を進めており、「A領域」においても、県平均を上回り、全国平均と比べてもわずかに下回る結果となった。問題形式別に見ると、短答式や記述式の問題は県・全国平均を共に上回る結果となっているが、式や図を読み取る選択式の問題は県・全国平均よりやや下回る結果となった。これは、自分の考えを表現し伝え合う活動において、式や図、具体物を使って説明することが習慣化されておらず、他者の考えを理解する力が十分に育成されていないことが一因だと考える。

### (2) 学力向上のための取組

研究主題にある「自分の考えを豊かに表現することのできる子」の育成に向け、『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』の「見いだす」「広げ深める」に焦点をあて、次のような取組を行った。

#### ① 日常の事象から問題を見だし、解決の方法を考え、数学的な結果を得る。

第4学年の「小数のかけ算やわり算」では、「学校の2階の床から3階の床までの高さを求めるにはどうしたらよいだろうか」という学習問題を立て、2階から3階までにある階段の段数や、それぞれの階段1段分の長さを実測し、計算して求める活動を展開した。(写真1) 同じ高さに見える階段も場所によって高さが異なり、実測しながら全ての階段の高さを足して計算していく過程で、その大変さを児童たちは実感した。(写真2) それを踏まえ比較検討の場では、実測した高さを

およその数で表したり、同じ高さの階段はかけ算でまとめて計算したりすることの良さを共有することができた。これらの活動を通し、数学的に解決した結果を日常の場面に照らし合わせて振り返ることにより、数学的な結果が日常でどのような意味付けができるのかを児童に検討させる場を設定した。

(写真1)



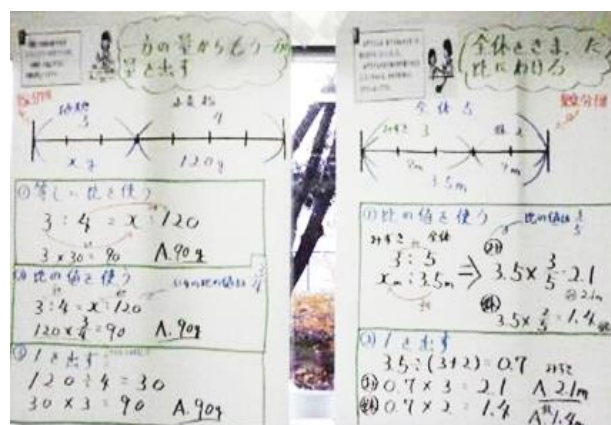
(写真2)



## ② 既習事項をまとめた掲示物をもとに学習問題を立て、学習の見通しをもつ。

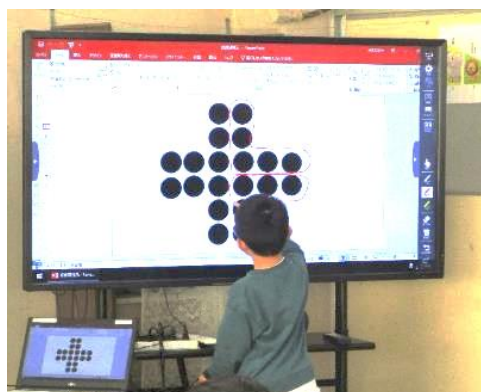
令和5年度から実践モデルプログラム内の「見いだす」に焦点をあてた取組として、学習の軌跡がわかる既習の掲示物や児童のつづやきをもとに、児童の言葉で学習問題を立てる展開を意識して授業実践を継続した。既習事項を振り返り、新たな疑問をもとに学習問題を立てることにより、児童の学びが主体的なものとなった。また、これらの掲示物により、既習の考え方をもとに学習の見通しをもつことができ、自力解決する場においても有効であった。(写真3)

(写真3)



## ③ 互いに学び合うことを通して、多様な考え方を理解し合う。

(写真4)



「見方・考え方」を働かせながら自分の考えを伝え、友達の考えを聞いて疑問点を問い直す活動を充実させるために、大型提示装置等のICTの活用を図った。比較検討の場においては、自力解決時に自分の考えを書いたノートやワークシートを授業支援ソフトの課題提出機能等を活用しながら、全体で共有することができた。(写真4)

また、算数の学習において、年間を通して授業の振り返り（算数日記）を書く活動に取り組んでいる。算数日記の内容については、大型提示装置を活用して、①友達の考えを聞いてなるほどと思ったこと、②学習を通して生まれた新たな疑問、③わからなかったけれどもできるようになったこと等を共有することができた。

#### ④ 学習規律を整えるとともに、話し合い活動の進め方やグループの編成を工夫する。

「課題提示をする」→「見通しを立てる」(既習との違いに気付く)→「学習問題を考える」→「自力解決をする」→「比較検討をする」→「学習のまとめ・振り返りをする」という基本的な授業スタイルを全校で統一して授業展開を行った。また、課題提示の場面では、わかっていること(数字)に青線を、聞かれていることに赤線を引くこと、ノート書き方では、学習問題は青で、まとめは赤で囲むことを共通理解している。

比較検討の場においては、「小グループによる話し合い活動」→「クラス全体での共有」の流れのもとで進めており、小グループにおける話し合い活動が深まりのあるものとなるよう算数の習熟度や話し合い活動がスムーズに行えることを考慮した小グループを編成している。(写真5・6)話し合い活動においては、①自分と友達との考え方の相違点に気を付けながら聞くこと、②友達と友達との考え方の相違点に気を付けながら聞くこと、③式や図、具体物を指し示したり、操作したりしながら説明することを意識させた。

(写真5)



(写真6)

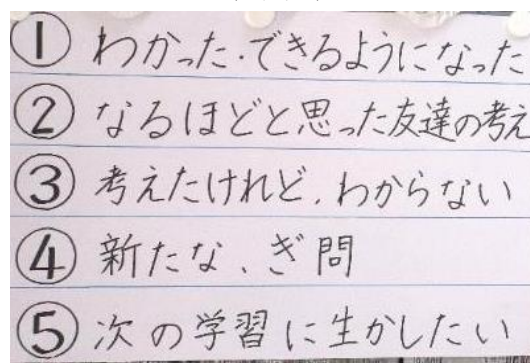


#### (3) 加配教員(学習サポーターを含む)の活用

少人数指導教員や「ちばっ子の学び変革」推進事業の加配教員と共に、既習事項に関するプレテストの結果や授業の振り返り(算数日記)をもとに、児童の実態や学習の軌跡について共有を図り、習熟度に応じた教材(ワークシート)の工夫や、指導内容の精選化を図ることに努めた。(写真7)

各単元の指導にあたっては、学年の実態に応じてティーム・ティーチングによる指導を行ったり、既習事項に関するプレテストの結果をもとに、学年を3、4クラスの習熟度別に分けて指導を行ったり、個や習熟度に応じた学習問題の設定や素材の提示の仕方を変えたりするなど、工夫して指導を行うことができた。

(写真7)



【算数日記】振り返りの視点

### 3 研究の成果

・「ちばっ子の学び変革」では、『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』の活用を通し、「主体的・対話的で深い学び」を実現することに努めることができた。特に、実践モデルプログラム内の「見いだす」に焦点をあてた取組では、児童の学習の軌跡がわかる掲示物を活用し、児童のつぶやきや疑問をもとに学習問題を立てることを習慣化することで、児童自ら疑問や課題意識をもてるようになるなど学びが主体的なものとなった。また、「広げ深める」の達成に向けた取組では、比較検討にあたって、①「自分と友達との考え方の違い」「友達と他の友達との考え方の違い」に着目しながら話し合い活動を行うこと、②「小グループによる意見交流→クラス全体での意見交流」の流れを汲むことを意識した授業展開を、授業研究会における検証授業に限らず、ふだんの授業においても実践することで、児童は考え方を共有するよさや楽しさを実感するとともに、学習への理解を深めているという結果が、アンケート調査から得られた。

・「算数日記」では、年間を通して学習の振り返りを児童一人一人が実践してきた。「算数日記」を書くにあたっては、①わかったこと・できるようになったこと、②なるほどと思った友達の考え、③考えたけれど、わからなかったこと、④新たな疑問、⑤次の学習に活かしたいこと等、振り返りの視点を明らかにしながら取り組ませることで、授業者は児童の実態把握や次時以降の授業での指導改善の資料として活用することができた。また、前述の比較検討の場の工夫によって、児童は学習への理解を深めており、「算数日記」の記述を分析すると、「自分と違う考え方を知ることができた」「新しく知った友達の考え方を活用したい」と回答した児童の割合が増加していた。

### 4 今後の課題

・「ちばっ子の学び変革」推進事業の2年間の取組を通して、児童の関心・意欲や既習の掲示物をもとに児童が学習問題を「見いだす」ことの習慣化が図られるようになってきた。今後は、実生活に即して学習問題を立てるだけではなく、解決した数学的な結果を日常に照らし合わせて振り返る活動も合わせて行っていきたい。

・「絵や図・数式を活用して自分なりの解決方法を表現すること」「グループ活動等を取り入れ比較検討の場を工夫すること」など、「広げ深める」場面に焦点をあてた授業実践に全校で取り組んできた。しかし、自力解決や比較検討の場で活用する「数図ブロック」や「テープ図」、「線分図」、「関係図」を、①教師側はなぜ活用させたいのか、②児童側は活用することでどのようなよさを感じることができのかを意識した授業づくりを行ってきたが、今後も継続して行っていきたい。